

# 昭和二十八年年度修士論文要約

## 近郊農村の経済構造に及ぼす地理的基礎に關する諸問題

都市経済が近郊農村より漸次全国へ波及しつつある現在、先進農業地域としての近郊農村が幾多の相克と矛盾、融合、同化のプロセスを経て、高度農業による多角的経営を以て自己の生活手段を獲得しつつある。かかる発展過程にある京都、大阪の近郊農村の経済構造の機能、特質は次の如き地理的基礎に立脚している。即ち低湿な淀川兩岸の輪中地域に於て、蓮根栽培（左岸）、杞柳栽培（右岸）が共に地形卑湿で排水不良、高い堤防が輪中聚落の外廓的主体をなし、他作物不適であり、又傾斜地立地村落の位置する西京丘陵地域の苜蓿栽培も前二者同様地形、土壌、氣候因子の適合性、大都市滋養圏内の優位な地理的位置、交通の発達、完全な余剰努力の利用、社会的経済的諸要因が結合し、夫々全国屈指の生産地域をなし、今後益々近郊農村の拡大性を伴いつつ、農村の都市的経済化への過程を迎るであらう。（森田敬一）

## 近畿地方の工業人口の発展過程

明治以降の我が国工業人口の変遷は徐々であり、英米仏は早くより優位を占め、米國は明治―昭和初期の間著しく飛躍を遂げ夫々の特色を示している。近畿地方のそれを見ると、明治後半には我が国産業革命期の様相を反映し、工業人口の増減率を見ると重工業の盛んな地域は根底より減少すること無く、軍事的都市の増減は急激である。都市は経済状態の変化に鋭敏で、特に新興地方都市はその盛衰が著しく、戦時生産機構の在り方

の一面を現わし、軍需工業のみに頼ることの危険性を示すものであり、朝鮮動乱後に來たるべきものを暗示する様にも思われる。要するに本地方は、我が国経済の縮図であり、我が国経済が農から脱し切れぬこと、戦争が大きな影響力を持つこと、明治時代は辮を並べ工業が発展したが、其後は社会の進歩に従い人文的条件が大きく影響し、地域によってその発展衰微を異にすることが知られる。（数井良雄）

## 日本塩業の研究

「Die Lebensduft」としての塩は古來人文現象の重要な対象となった。日本塩田は、無埤塩焼・有埤焼・揚浜式間田入浜式塩田各時代の累進的發展過程をとっている。中世末期の塩田出現以來、例えば赤穂塩田等五期の革命を経て今日に至り、現在は第六革命期の過渡期である。

日本塩業は資本主義化が最も早く実現した生産類型である。然し地域的分業は資本主義の発達と共に成熟したが、生産的分業は未発達にて、塩供給不足を解決する上からも愈々その研究が計られねばならない。又塩の持つ本質より、古來政策の必然性は勿論のこと、交通需要の主体者ともなった。政策類型の地域差は、塩田核心地成立の主要因となり、流通面では交通路の開拓者である。且その商業資本は国内経済化への推進力ともなった。一方生産・流通両部門の考察を通じて経済秩序發展段階考究の一尺度となり、地域性把握の一指標ともなる。斯様に塩業は社会科学の研究対象として、極めて重要な資料を提供すると共に、塩業發展の推進力は経済政策にあったところから、今日のあり方にも大いに指針を与えるところもなる。（富岡儀八）